

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ありのままの自分を包み込む世界を感じる : お天道様はお見通しよ
Author(s)	中川, 節子
Citation	児童の言語生態研究 , 17 : 57 - 63
Issue Date	2009-07-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045207
Right	
Relation	



国語の授業はこうする



2年生・感情

ありのままの自分を包み込む

世界を感じる ― お天道様はお見通しよー

教材『さるの手ぶくろ』 〈花岡大学作〉 (東京書籍 2年下)

中川 節子

○てるてる坊主だのみ

遠定の前の日「たのむぞ。」といつてくつつけている。

いつのまにか逆さになって、そして雨。

「お母さん、てるてる坊主のつけ方が悪いから雨だよ。」

逆立ちしてちや、てるてる坊主もおつちやう。 (3年男)

○ついでる

毎日はいているボロ靴

〈またそれはくのく〉

「いのく、ついでるんだ。」

〈何がく〉

「そりゃ、神様だよ。」

(3年男)

左記の二例は子供たちが日常に行っている

ことである。この他にも、じゃんけんで勝ちたい時のおまじない、走る時、十字を切っておがんだりする子もいる。大人でさえもジंकクスといって、くつを右からはくとか、段を上るときは左足からとか決めている人がいる。こんなふうに大人であっても、げんをか

つぐのである。まして子どもは自分より大きな力をいつも感じているのではないか。だからこそ日常生活に於いて、この世界（神様のくつついでる世界）を離そうとしないのではないか。いや、ひょっとしてこの世界の方が、子どもたちにとって、日常なのかもしれない。このもう一つの世界を私達は、子ども

の持つイマジネーションの世界というふうに考えている。

左記にあげた二つの例は伴に神だのみである。しかし、この男の子は決して○○教の家

の子ではない。そして、このようになってる坊主や「ついでる」「ついでない」ということばは、小学校低学年では本来に日常に使われている。しかし改めて、神様がつくつとさらりと言われ、私も虚をつかれた。ものの怪が憑くと同じ、つくであつたのだと、再発

見した思いである。

次の例も、それにあたるのではないのか。

○魔よけ

〈魔よけのお面に悪さをするとバチがあたるよ〉と言つた次の日、青い顔してすつとんできたK君

「先生の言うことが本当だったよ。ぼく、きょう、とびあがつたとき、マヨケのお面

がおこつてそれがぼくの頭にガーンて、ぼく本当にバチがあつたよ。だからもどし

つ『むめど』つつよーくおがんでおいたよ。』
(30年男)

「バチあたり」ということばはもう死語になつているかと思つていたが、そうでもなく、ちゃんと子供の心に住んでいる。

○お地藏さま

いつも、墓参りの帰りに六地藏の前を通る。地藏の前にはいつもお供え物がある。くいしん坊のFちゃんはそつと目でそれを追つ。私が、へFーダメよ

「わかつてるよ。こんな六人にみられちゃできないよ。」
(20年男)

『お天道様はお見通しよ。』の世界である。

お地藏様の存在も又子供の世界には、ひとつ特殊なものなのかもしれない。

今回はこのお地藏様の登場する「さるの手ぶくろ」の話を使い、子供たちが、お地藏様に対して、どんな心を持つて接するか、そして、ただニコニコ立っているだけのお地藏様に自分を包み込む大きな力を感じることでできるのか。それと同時に、子どもたちの日常生活の中で、そういう心があるか、その体験も語ってもらえたらと考え、この授業を設定した。

授業の展開

授業の進め方は「さるの手ぶくろ」の挿し絵4枚とそれに伴う朗読を入れながら、それぞれが子ざるになつて、子ざるのことはや行動を考えながら、お話作りを徐々に行うというやり方をした。

①のお話を聞きながらみんなでその場面の絵を想像して絵を作る。

①のお話（朗読）

とうげにおじぞうさまがまつてありました。そのそばに大きなくすのきが一本立っていました。

ピューピューと強い北風がふいている、冬のはじめの、あるさむい日でした。一匹の子ざるが、村の小道でいもをひろつて、道をのぼつて来ました。

ちようどとうげまで来た時、むこうからだれかがやつてくるのに気がつきました。子ざるはあわててくすのきのぼつて、はかげからそつとようすをうかがいました。

（絵①を作る）

とうげをのぼつて来たのは、かわいらしい女の子でした。くすのきの下まで来ると、「あらつ。」



絵①

と言つて立ち止まりました。道ばたのかれ草の上に、まっかな小さな手ぶくろがおちていたからです。

「だれがおとしたのかしら。まだ新しい手ぶくろね。今にきつとさがしに来るわ。」

でも、その人が来るまでまつているわけにはいきません。女の子は、どうしたものかと、あたりを見まわしました。

（絵②を示す）

その時、女の子は、おじぞうさまが立っているのに気がつきました。

「あ、そうだ。いいことがあるわ。」

女の子は、おじぞうさまの前に行くと、ていねいにおじぎをして、言いました。

「この赤い手ぶくろ、おとした人がさがしに来るまで、手にはめていてくださいね。おね



絵②

がいします。」

女の子は、おじぞうさまのりょう手にそつと赤い手ぶくろをはめました。

そして、

「ではさようなら。おじぞうさま、おねがいます。」

と、もう一どいていねいにおじぎをして、とうげを下って行きました。

②のお話 (朗読)

子ぎるは、うつくしい赤い手ぶくろが、ほしくてたまらなくなりました。それで、だいいないもを木の上においたまま、いそいで木からおりて、おじぞうさまの前に行きました。

T さあ、お地藏様の前に行つて、このあと子ぎるはどうしたと思う？

C1 ウソをついて手袋を「ボクの手袋だから、持っていてくれてありがとうございしました。」つてウソをついて…で、あとおいもの事を気がついていなくて…（「ちよつとその前」と聞かれ）持つて帰つた。

C2 てんが君と少し似てるけど、おじぎをして手ぶくろをとつておじぎをしてとつた。

C3 えーと、お辞儀をしてお地藏さんの手ぶくろをとつて石を積んで持つて帰つた。

C1（発言直前にハツとして）そうか、勘違いした。（「それでもいいよ」と言われ）

でもさ、サルはくすのきにおいもを置いて木下に行つて女の子が手にお地藏さんの手にはめたのをとつていったんだから、木にのぼつて（T「お地藏さんが木にのぼつたの？」とつっこむ。するとちよつとむきになって）そういうことじゃなくて！お地藏さんは木にのぼれないから（「超能力！」と突つ込む声）で、また戻つて、サルはおうちに帰つてから、手ぶくろを置いて、また戻つて木にのぼつてそのおいもをお地藏さんにあげた。

T じゃあどんなお話か絵で先をみてみよう。（絵③を示す）

T この目は何ですか？この目。

C1 すみませんしてる。

T すいませんって言っている目なの。どうしてすみませんなの？



絵③

C1 ウソをついちやつたから。

T 石を積んで帰つたのも「すみません」つていう気持ちがあるんだ。

C4 石を並べて「すみません」つて言ったんだ。（「いくつもいくつもいくつも積んだんだ」と友達に言われ）じゃあ、宇宙まで？

T …でもね…手袋はサルのだつたのかな？ちよつとお話の続きを読んでいいかな。（「いいです」）

③のお話 (朗読)

「おじぞうさま。その手ぶくろは、わたしが

おとしたのです。おかえしください。」と、うそをつきました。(T「おお、いいぞ、てんが君」)

けれども、おじぞうさまは、いつものようにこにこした顔のまま、何も答えませんでした。子ざるは、びくびくしながら、すばやくおじぞうさまの手から手ぶくろをとって、自分の手にはめてみました。やわらかくて、あたたかくて、なんともいえないいい気持ちです。

「山へ帰って、みんなに見せてやろう。」

その時、子ざるは、くすのきの上にもわすれて来たことに、気がきました。

「おっと、だいじなごちそうをわすれるところだったぞ。」

T そのあと子ざるはどうしたかな？ちよつと考えて。

C5 自分が手袋をとっていつちやつて、おいもを半分に自分で割って、片方をお地藏様にあげて、片方半分を自分の方におうちを持って帰った。

C2 あきちゃんのとに続けるけど…あきちゃんはおうちに帰って帰るって言ったけど、ぼくは食べながら帰る。

C1 サルが手袋をはめたでしょ。その時あったかかったから、おいもを入れていけば暖まるかなと思って、おいもを半分にしてそ

の一つを手袋の中に入れて持って帰った。

C5 サルはおいもとか(聞き取れず)自分では切れないけれど、近くに木が落ちていたと思う…くすのきの部分が落ちていたと思つて…木で穴をあけながらおいもを切った。(子どもたちは、おいもを持って帰る工夫ばかりを考え、肝心の手ぶくろをはめていて、木にのぼるといふことに気付いていない。そこで実演をしてみた。)

T じゃあ次を読んでもらいますが、みんなはおうちに持って帰る時にいろいろな工夫をしてくれていたね。(それぞれ再確認)で、手袋なんだけど…(代用品を取り出す)先生は子ざるです。「さあ、あそこにおいもがあるぞ」…木です。おさるは飛びついた…おさるは手袋をしているんだよ。

C「汚れる」「すべるな」(口々に)

T すべつちやう!

C サルも木から落ちる。手ぶくろをはめているからスルツとすべつちやう。(口々に)
(やつと手ぶくろのままではすべつてしまうことに気付いた)

④のお話(朗読)

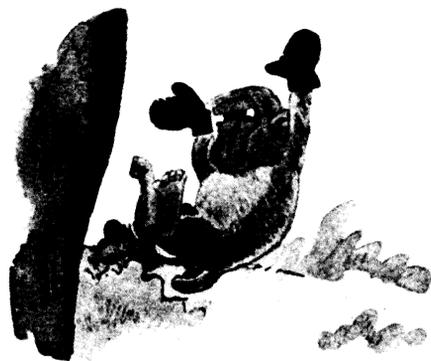
子ざるは、いそいで木にとびつきました。

ところが、手がつるりとすべつて、すつてんころりとかれ草の上におちました。

子ざるは、こんどはようじんして、前より

たかいところにとびつきました。けれども、また、手をすべらせて、道の上におちてしまいました。(絵④を示す)

「あいたつ。どうしたのかな。」



絵④

子ざるはもう一どやつてみました。

やっぱり手がすべつておちてしまいました。

子ざるの顔は、きゆうにまっさおになりました。子ざるは、おじぞうさまの方を見ながら、ぶるぶるふるえだしました。

T 子ざるは、どうしてお地藏様の顔をみてブルブル震えたんだろうね。(考える時間を与える)

…何回やつても落っこちてしまったんだね。

C ↓ 木につかまっても落ちてしまうから、気がついて手ぶくろをお地藏さんに渡し

て、で、木の上に登って、戻ってきて渡して、また手袋を持って：行った（？と、最後になって自信がない様子）

C2 てんちゃんはお地藏さんに預けたっていうけど、預けられないから（「どうして？」）動かないから。だからお地藏さんの手にはめた。

（青くなったわけをたずねているのに、なかなか核心に触れない）

T 落ちちやったあと、サルは真っ青になっちゃったんだけど、真っ青になるってどういうことなの？

C 「痛かった」「怒る」

「なんかねー、怖かった」

「びびった」

「なんか調子が悪くなった」（口々に）

T 何で調子が悪くなったの？

C6 一生木に登れないと思った。

T そうよ、一生木に登れないかと思っちゃったのよ。サルが木に登れなかったら何よそれは！サルが木に登れなかったらそれは人間に：（たいへいが盛んに挙手。指名するが発言しようとしたことを忘れる）一生木に登れなかったらそれはサルでなくなっちゃうじゃないのよ！サルはシウルシウルシウルって登ってヤッホーなんてやってるからサルなんですよ。木の下でうろろしていたらサルじゃないじゃない。何でそんなことになった

の？

C1 「手袋をはめているのに気付いてなくてそれで怖くなっちゃった」

T そうなのよ。怖くなっちゃったのよ。手袋をはめたまんまだったから。そうだよ。ね。そしてお地藏様の前に急いで行ったのよ。

C7 呪いがかかった：

T 何で呪いがかかるのよ。（何人かが盛んにハイハイと挙手）呪いって何かしなければかからない。

C3 ウソをついたから！

T どうだ！ウソをついたから！（子ども達から「正解」の声多数）

（板書をふりかえって）ここを見て、てんがザルなんかウソをつけてボクの手袋をありがとうございました、なんてシャーシャーとウソをつけているんだよ。イモはあげているかもしれないけど手袋は勝手に持ってきちゃってるんだから。

C5 自分が手袋を盗んでお地藏様が怒ってそれから呪いがかかって：（この発言の間に手前の方が「天罰って事？」というつぶやき。）

C4 バチがあたった。

（呪い、バチがあたる等、お地藏様の人の力を越えた力を感じはじめています。また天罰等というこぼれもちゃんと生きている。）

T バチっていうのはお地藏様があてるの？

（みんなエツ？とつまった雰囲気になる）
じゃあ続きを読んでみよう。

（読む前にワークシートを配る）

⑤のお話（朗読）

（そこでね、サルがお地藏様の前で言いました。）

「ウソについて、おじぞうさまから手ぶくろをぬすんだので、ばちがあたったのにちがいない。」

子ざるは、ふるえながらおじぞうさまのそばへ近づきました。そして、赤い手ぶくろをぬいで、もとのようにおじぞうさまの手にはめると、…

（次の子ざるの言葉とそれに対しての地藏の様子をワークシートに記入する。約7分）

〈子ざるの言葉の発表〉

C8 「ボクの手袋を持っていてありがとう。」とウソをつけて「ごめんなさい。もうウソはつきません。」

C3 ウソをつけてごめんなさい。さつまいもを二つあげます。もうやらないから許してください。

C9 子ざるはお地藏様にあやまっておまいりのことばであった

〈お地藏様の様子 of 発表〉

C3 顔をあげてみるとお地藏様はニコニコと笑っていました。そしてサルは二度とワソをつかなくなりました。

C10 子ぎるがかわいそうだから、まだ何も言わないで、じっと立っていました。

C1 ニコニコしてお猿への呪いをときました。

C4 いつものニコニコ顔で何も言いませんでした。

C11 お地藏様は怒っていたけど：（つまってしまったのでT代読）ちよつと怒っていたけど簡単に許せない。（「顔はどんな顔をしていただろう？」と問うと首をかしげる）

C5 カンカンに怒っていました。

C12 怒った顔をしていました。その顔は呪いをかけたようでした。

C13 お地藏様は子ぎるにバチをあてて怒っていました。

T じゃあお話はどうかみてみるね。

⑥のお話（朗読）

顔を上げて見ると、おじぞうさまは、いつものように、にこにこしたやさしい顔をしています。子ぎるは、ほつとして、くすのきの下へいききました。木にとびついてみると、こんどはすべりません。子ぎるはいそいでいも

をとっておりて来ると、おじぞうさまに、「ありがとうございます。ありがとうございます。」

と何どもおれいをいって、山のおくへ帰って行きました。とうげはもう夕ぐれです。つめたい北風が強くふいていました。

（絵⑤を示す）



絵⑤

T さあ、お地藏様はどんな顔で子ぎるを見していましたか？

数名 歌うようにふしをつけて「にっこにこ」

」

C4 お礼をしたから。

C5 帰るときにプンプン怒って見送りをしたら困ると思つて。

C3 最初のへんはウソをついて、お地藏

様は石みたいだから顔はかわらないで、心の中は怒っていると思うけど、謝ってくれたからにっこにこ。

（はじめから、お地藏様の顔がニコニコだったことを思い出して、地藏は変わらない。子ぎるの心がゆれ動いていただけ。お地藏様は子ぎるを包み込み、すべてお見通しであることが少しはわかったように感じられた。）

T さいごまで読みましょう。

⑦のお話（朗読）

とうげはもうゆうぐれです。つめたい北風が強くふいていました。やさしいわらいをかべたおじぞうさまは、赤い手ぶくろをはめて、じっと立っていました。

（おしまい。）

〈子どもたちの日常生活におけるなむなむを最後に聞いた。〉

T お地藏様にあやまるときにどんな格好で謝つたと思う？（頭を下げるポーズ）そうかな：先生がおさるだったらこうやったと思う（とひぎをつけて手を合わせたポーズ）みんなが今までの生活でなむなむした事あるのかな？

C1 お墓に行つてやるときに、お菓子をやるじゃん。そのときボクはつまみぐいをしてバチがあたつて：足のうしろに木があつて

転げて落ちちゃって…。なむなむしながら後ろに下がったら…。

C14 ボクはお墓でね…アツ、おうちでなむなむしてね、それでお菓子があつたらつまみ食いをしてね、バチがあたって、お線香が手にあたったんだけど、水があつたから大丈夫だった。

C15 まさお君と似ているんだけど、相撲大会に行く時に一位になりますように、つてしたら一位になれた。

C14 お墓参りの時…妹の墓だからね、手を合わせたりにして。

〈子どもは、日常的に祈りの世界にいるというところがこの子どもたちの生活を聞くことで明確になった。こういうふうには祈らなければならぬという道徳的なことではなく、自身が素直になりさえすれば自分自身を包み込む大きな世界を知ることになるということ、そこがやりたかったし、又、子どもたちの話の随所にそれを感じることができたように思う。まだまだ2年生は、神の子だなど思った。そして楽しかった。〉

(東京・町田市立小川小学校教諭)

児童の言語生態研究趣意

国語教育の実践と研究は、日々ゆるが

せにできない永遠の基礎約課題でありま

す。近来言語活動を重視し言語能力の増

進を要望される時運に従い、一見、国語

教育の実践と研究は活発さを加えたかに

見えますが、国語教育は技能的となり、

読み、書き、話し聞く三領域に分割され

た言語生活形態の学習を専らとする風潮

さえ生んで参りました。

われわれは成育しつつある子どもの言

語生態を、正確に見届けることを、何よ

りの国語教育の基礎に据え、そこから出

発すべきであります。遅ればせながら、

感情・思考及び意識の発達とともにある

子どものことばの実態を、調査、研究し

て、子どもの側からの発言を世に問いたい

と思えます。

思えば、子どもの言語生態とも言うべ

き基礎資料を得ることなしに、国語教育

の目的と方法が論じられすぎました。ま

た、われわれ現場人が、それらの基礎資

料をどれほど整えて子どもに接していた

でありましょう。国語教育の目的と方法

及び実践の確立に資すべき、最初の条件

であったと思うのであります。

われわれは相互に連絡協力して、この

調査、研究を進め、小冊子といえども、

発達途上における子どもの心とことばと

の成長並びにその明暗を正確に写しとつ

た貴重な資料を収集して、広く斯界に頒

布することにいたしました。

昭和四十三年四月

児童の言語生態研究 同人 一 同

主宰 玉川大学教授 上原 輝 男

顧問 玉川大学教授 日名子 太郎